

■ 信じるべきもの

あるクリスマスの夜、アメリカにある食品工場で一人の男性が残って仕事をしていました。

そして最後に、最終チェックをしようとして冷凍庫に向かいました。しかし、その冷凍庫はいつもと様子が違っていました。なぜか扉が開きにくくなっていたのです、それでもなんとか扉をこじ開けて入りましたが、そこで扉が閉まってしまい、彼は外に出ることが出来なくなってしまいました。その扉は油圧で動く扉でした。彼は長年勤めていたので、冷凍庫に閉じ込められることがどういうことか分かっていました。残念ながら彼は3日後に遺体で発見されます。しかし検死をした結果、彼の死因は低体温症ではありませんでした。その冷凍庫は実は電源が入っておらず、死ぬような寒さではなかったのです。彼の死因はショック死でした。彼は閉じ込められてしまったという恐怖から、自らで死を招いてしまったのです。

これは私たちの人生にも当てはまります。詩篇のなかでダビデは私たちの人生を羊に例えています。羊も暴れて死を招くときは、多くの場合慌てふためき、びっくりして死んでしまいます。だから神様は人間を羊に例えています。焦った時に私たちは失敗を招いてしまうのです。だから神様は私たちに平安があるようにと語られています。

神様が私たちにしようとされているのは、宝くじやギャンブルなどのように当たるかどうかのわからないもの。また、一時的に何か得られるようなものではありません。信じなくてよいものを信じるのではなく、本当に信じるべきものを信じていかなければなりません。

■ 信じる決断 ヨハネ 1:9 ~ 12

私たちの心の暗闇に神様の光が照らされました。私たちが照らされて見えるようになるためです。しかし私たちが不安になるのは、その先がどうなるかわからないからです。しかし私たちは、この地上の人生を終えたあと神様のところに帰ることを知っています。そして神様は、この地上にあっても私たちに祝福するといわれました。それを信じているでしょうか。

いちじくの木の場合があります。聖書に出てくるいちじくは、日本のいちじくと違います。最初に「バゲ」という初なりのいちじくができて、そのあとに「テヘナ」という本なりのいちじくができます。当時、貧しい人たちは食べるものがなく、この初なりのいちじくを食べて生きていました。そんななか、イエスがいちじくの木を見ると、実がなっていませんでした。聖書に「いちじくのなる季節ではなかった」と書かれています。その時は、本なりのいちじくがなる季節ではありませんでした。しかし、イエスは本なりのいちじくをならす前の、初なりのいちじくがなっていないことに気づかれたのです。そこでイエスは「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように」と言われました。その木はイエスが呪わなくても実がなることはありませんでした。すでにその木は死んでいたのです。そしてその後、いちじくの木の前を通ったとき、その木は根まで枯れていました。

もし今、先の見えないような暗闇の中にいたとしても、私たちに灯された微かな光を信じて感謝できるでしょうか。あきらめるのか、信じるのかは私たち次第です。本なりの実は神様が成らせませんが、初なりの実を成らせる決断は私たちにしかできないのです。

■ 神の栄光を知る知識 IIコリント 4:6

「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。(IIコリント 4:6)

私たちはいつも知恵が必要だと語られています。しかしここでは知識と書かれています。信じるための情報は知識からも得ることが出来ます。私たちに過去、神様がしてくださった素晴らしい御業を思い起こしましょう。その情報によって私たちは暗闇のなかでも、一筋の光を信じて進むことが出来ます。

7日間、ひと月、365日、神様が定めた節目は私たちにとって必要なものです。1年を終えようとしている今、今年初めに決断したことがまだ途中であるなら、来年の決断と合わせて、その目標ができると信じて歩んでください。そうすれば、来年必ず祝福された1年になるはずです。

■ 詩篇 103:1~5から

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。(詩篇 103:1)

ダビデはなぜ神様をほめたたえることができたのでしょうか。それは信じていたからです。「あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、鷲のように、新しくなる。」このことをダビデは信じました。信じるのがすべてのスタートなのです。

■ 神様が与えてくださるもの

アメリカから、ある宣教師が貧しい国へ送られました。妻や子ども達がいるなか、自分も子どもも働いてなんとか生活をしました。しかしそれでもお金が足りず苦しい生活を送っていました。そんななか、クリスマス時期になると毎年、彼の兄から50万円分のお金が送られてきました。しかし、その年はなぜか遅れていました。そして大きな段ボールが送られてきたのです。そこには家族全員分のブーツが入っていました。お金が入っていると思っていた彼らは内心がっかりしてしまいました。しかしその日から大寒波が3週間続きました。兄はその情報を知って、彼らが困らないように防寒用のブーツを送ってくれたのです。しかし貧しい状況は変わりません。それでも神様が与えてくださったと感謝しながら、靴を履こうとしたところ、中にはいつもの倍のお金が入っていたそうです。彼は、神様が与えてくださったものに自分で判断しようとしたことを悔い改めたそうです。私たちが神様にたくさんのお金を願ってききました。しかし神様は今だけを見ているではありません。一生にわたって良いもので満たそうとくださっています。私たちはそれを信じようとするので、今与えられているものを感謝することができるのです。

まとめ

私たちが願うことは、私たちが願ったことが叶えられることではなく、神様と一緒にいることではないでしょうか。もし神様と一緒にいるなら、たとえ今がどうであれ、私たちはそのことを通してねられて、ねられた品性が多い恵みを生み出します。そして私たちを通して多くの実が結ばれ、私たちの一生が良いもので満たされるのです。私たちは信じることができます。